東京大学アジア研究図書館ニューズレター 第9号

ISSN 2758-0091

2022年10月3日

アジア研究圖書館

新館長挨拶（佐川 英治） 1

アジア研究図書館活動報告 2

「第21届中国古代小説戯曲文献暨数字化国際学術研討会」開催報告

（荒木 達雄（U-PARL））

「エジプト学若手研究者養成セミナー（2022年度夏期）」開催報告

（永井 正勝（U-PARL））

北京市文学芸術界連合会からの書籍寄贈および贈呈式参加記（河野 正） 3

アジア研究図書館利用案内

次号の予定

編集後記

編集・発行：東京大学附属図書館アジア研究図書館研究開発部門（RASARL）

〒113-0033

東京都文京区本郷7－3－1

東京大学附属図書館　アジア研究図書館担当

asialib@lib.u-tokyo.ac.jp

https://www.lib.u-tokyo.ac.jp/ja/library/asia

新館長挨拶

佐川　英治
（アジア研究図書館長、人文社会系研究科教授）

7 月から城山智子前館長の任期を引き継ぎ館長となりました。私は中国古代史を専攻していますが、最初にアジア研究図書館の構想を聞いたとき、アジアの研究にたずさわる者の一人として、胸のすくような感動と期待を覚えたのを思い出します。私のような古典を研究している者の中には、とにかく本が好きで、本にたずさわっていたいのでこの道に入ったという人も少なくありません。私などは「本の虫」としてはぜんぜん疎いほうで、学生の頃には本屋にいってはそういった人たちの選書を横目で見ながら（時には欲しかった稀覯本を先に取られて落胆したりしつつ）多くのことを学んできました。そうした人にふさわしい理想の仕事の一つは、やはり専門的な知識をもって自分の研究もできる図書館司書、今の言葉でいえば、サブジェクト・ライブラインであると思います。しかし、これまで日本には職業としてそのような選択肢はありませんでした。これは日本の学問の欠落であると思っています。多くの場合、研究は資料の発見や収集によって着想したり促進されたりするわけで、そのような機会はもっと多くの人に開かれているべきです。サブジェクト・ライブラリアンはその機会をより公共的に提供できる人です。いまアジア研究図書館はそこに踏み出しているわけですから、これには大きな期待があります。

もう一つ、自分が館長になってみて知ったアジア研究図書館の魅力に、研究部門の方々の能力をお借りしておこなう多言語資料の収集と整理があります。アジアには、世界の人口の約 60％が暮らしているといわれており、そこに展開する人々の暮らしや言語を考えれば、アジアはまさに多様性の宝庫です。しかし、通常は言葉の壁に阻まれて、なかなかその多様性の魅力を享受することができません。その意味で、アジア研究図書館は、多言語資料の収集や整理を通じて、アジアの多様性の価値を国内外に発信する中心的な機関となりうると考えています。

アジア研究図書館は 2020 年 10 月に開館しましたが、初代館長の小野塚知二先生は当時のインタビューで、「当初の理想を形にするにはあと 10 年はかかるでしょう。大変な事業ですが、成し遂げれば世界のアジア研究は飛躍的に進むはずです。」とおっしゃっておられます。正直、私には少々荷が重い仕事ですが、任期までこの事業の完成に向けて微力を尽くすつもりです。

館長略歴
岡山大学文学部卒業。大阪市立大学大学院文学研究科博士課程修了。博士（文学）。岡山大学大学院社会文化科学研究科准教授、東京大学大学院人文社会系研究科准教授、同教授を経て、2022 年 7 月より現職。

アジア研究図書館活動報告

「第 21 届中国古代小説戲曲文献暨数字化国際学術研討会」開催報告

（U-PARL　荒木　達雄）

去る 2022 年 8 月 29 日（月）、「第 21 届中国古代小説戲曲文献暨数字化国際学術研討会（第 21 回中国古典小説戯曲文献およびデジタル化国際学会）」が、U-PARL の主管のもと開催された。本学会は首都師範大学中国伝統文化数字化中心の周文業氏の提唱により 2001 年にはじまり、2003 年以降は隔年で中国大陸外の機関が開催を主管する慣例となっている。

開催方式は当初、完全な対面方式を要望されていたものの、中国から日本への短期旅行の手続き等の見通しが立たないこと、日本においても感染症の再拡大の傾向が明らかになったことから完全オンライン方式とした。

研究報告には、日本、中国大陸、台湾から 29 件の応募があり、16 件を採用。うち 3 名を基調報告者とし、残る 13 名を一般報告者とした。このほか、日本開催ならではの企画として、本学を中心に行われている「デジタル源氏物語プロジェクト」について、プログラム開発者である本学史料編纂所・中村覚助教の講演を挙行した。

中国では出席者全員が報告を行う形式の学会も少なくないが、今回は聴講のみの募集も並行して行い、計 82 名の応募を受け付けた。開催当日のオンラインシステム接続者総数は運営委員含め 100 名、同時接続者数は 59～79 名であった。本学会のプログラムは現在も U-PARL ウェブサイトに掲載されている。

［U-PARL ウェブサイト http://u-parl.lib.u-tokyo.ac.jp/archives/japanese/21thdigitalchineseclassics］

「エジプト学若手研究者養成セミナー（2022 年度夏期）」開催報告

（U-PARL　永井　正勝）

U-PARL 協働型アジア研究プロジェクト「古代エジプト研究の総合知創出に向けた基礎的取り組み」（代表：永井正勝）では、エジプト学に関する総合知を次世代に継承すべく、学生・院生を対象としたインターカレッジのエジプト学セミナーをオンライン形式で実施した。期間とプログラムは以下の通りである。

［期間］9 月 1 日（木）～4 日（金）13 時～16 時 30 分（90 分講義 2 コマ＋質疑応答）

［プログラム］

9 月 1 日（木）「言語学からみた古代エジプト語資料のドキュメンテーション：文字、語、構文の記述」永井正勝（東京大学 U-PARL）

9 月 2 日（金）「エジプト学における歴史学的研究：前 1 千年紀のエジプト史研究を例として」藤井信之（関西大学/U-PARL 共同研究員）

9 月 3 日（土）「遺物と科学」山花京子（東海大学/U-PARL 共同研究員）

9 月 4 日（日）「古代エジプト建築・美術研究」安岡義文（早稲田大学/U-PARL 共同研究員）

本セミナーには、15 大学より 26 名の応募があり、審査のうえ全員を受け入れた。参加者の内訳は学部生 16 名（1 年 3 名、2 年 3 名、3 年 5 名、4 年 5 名）、修士課程 4 名（1 年 1 名、2 年 2 名、3 年 1 名）、博士課程 5 名（1 年 2 名、2 年 2 名、3 年 1 名）、履修生 1 名であった。

［U-PARL ウェブサイト http://u-parl.lib.u-tokyo.ac.jp/archives/japanese/egsem2022a］

北京市文学芸術界連合会からの書籍寄贈および贈呈式参加記

河野　正
（附属図書館アジア研究図書館研究開発部門　助教）

この度「北京文学を東京へ」と銘打ち、北京市文学芸術界連合会（以下文連）より当館への書籍寄贈が行われた。これは日中国交正常化50周年を記念したものである。9月26日に出版クラブ（東京・千代田区）で開催された日中文学交流セミナー内で贈呈式が行われ、当館から佐川館長及び河野が参加した。

中華全国文連は中華人民共和国成立前夜、1949年7月に成立した組織であり、党・国家と文芸界を橋渡しする存在として位置付けられている。北京市文連はその北京支部に当たる。

北京市文連の初代主席は作家の老舎（1899-1966）であり、今回の交流セミナーも北京老舎文学院が運営を行った。老舎は北京生まれ北京育ちで、その作品も多くが北京の市井の人々を描いたものである。老舎がかつて暮らした四合院は、現在も北京市中心部に残され「老舎故居」として公開されている。天安門広場のすぐ南、清代から続く繁華街である前門近くには老舎の名を冠した「老舎茶館」があり。これは老舎の作品『茶館』にちなみ、茶を楽しみながら、かつての北京ではよく見られた大道芸や伝統芸能を楽しむこともできる。北京文化の象徴でもあり、老舎の作品に入り込めるような施設とも言える。

老舎はまさに北京文学を象徴する人物であり、今回の寄贈図書も老舎文学賞受賞作品や関係する作家が中心であった。

日中文学交流セミナーは ZOOM を利用して東京会場・北京会場をつなぐ方式で行われた。まず関係各者による開会挨拶が行われ、日中双方の中国文学関係者によって基調講演が行われた。

その後、北京在住の日本人研究者・文学者を含む中国側6人と日本側2人によって「中日両国のどのような文学作品、題材が、相手国に最も影響を与えたか？」、「現代児童文学の動向及び特徴」をテーマにディスカッションが行われた。

ディスカッション後、書籍の贈呈式が開催され、佐川館長が寄贈図書目録を受け取った。セミナーはその後、版権調印式、記念撮影と進み無事終了した。

本文末に掲載したリストの通り、全30冊のうち15冊が文学作品、15冊が故宮および北京に関するものである。余談ながら、文学作品、とりわけ現代作家の作品は当館の選書で手薄となる部分である。既に評価の定まった歴史上の文学者であれば資料として積極的に収集対象とすることができるが、評価が定まらない現代作家の場合、研究図書館として所蔵すべきか否か判断が難しい。今回は幸運にも北京市文連の選書眼に適った書籍を受贈することができた。2020年代の中国文学を研究する後世の研究者らによって活用されることを期待したい。

寄贈文献リスト

畢淑敏『女心理師』（生活・読書・新知三聯書店、2021）
竇欣平『北京古迹史話』（生活・読書・新知三聯書店、2021）
格非『月落荒寺』（人民文学出版社、2019）
李文儒『紫禁城六百年－帝王之軸』（中信出版集団股份有限公司、2020）
梁暁声『我和我的命』（人民文学出版社、2021）
劉東黎『北京－当歴史成為地理』（生活・読書・新知三聯書店、2021）
劉恒『四条漢子』（人民文学出版社、2014）
劉陽『北京中軸百年影像』（北京日報出版社、2021）
馬毓鴻『故宮簡史』（汕頭大学出版社、2020）
寧肯『北京－城与年』（北京十月文芸出版社、2017）
寧肯『環形山』（上海文芸出版社、2018）
寧肯『蒙面之城』（上海文芸出版社、2019）
邱華棟『北京伝』（北京十月文芸出版社、2020）
石一楓『世間已無陳金芳』（北京十月文芸出版社、2016）
万依『故宮与皇家生活』（広西師範大学出版社、2021）
文珍『柒』（北京時代華文書局、2017）
文珍『夜的女采摘員』（貴州人民出版社、2020）
肖復興『我們的老院』（北京十月文芸出版社、2017）
閻崇年『故宮六百年』上冊（華文出版社、2020）
閻崇年『故宮六百年』下冊（華文出版社、2020）
楊暁昇『好一個北京－作家筆下的北京』（首都師範大学出版社、2022）
于偵雲『紫禁城宮殿』（広西師範大学出版社、2021）
曾哲『老叔西大街的把角児』（北京十月文芸出版社、2014）
張程『故宮伝』（華文出版社、2020）
張悦然『我循着火光而来』（北京聯合出版公司、2017）
張之路『吉祥時光』（天天出版社、2022）
翟晨旭『故宮裏的中国史』（遼寧人民出版社、2022）
周暁楓『星魚』（新蕾出版社、2019）
朱家溍『故宮国宝 100 件』（広西師範大学出版社、2021）
祝勇『中国書写－紫禁城六百年』（上海文芸出版社、2020）

目録を受け取る佐川館長

関係者による記念撮影

アジア研究図書館利用案内

https://www.lib.u-tokyo.ac.jp/ja/library/asia/user-guide

場　所	総合図書館4階
開館日／閉館日	総合図書館の開館日・閉館日に準じます。
開館日	以下閉館日を除くすべての日
閉館日	年末年始(12月28日～1月3日)
	定例休館日(おおむね毎月第4木曜日)
	夏季の一斉休業日(2日間)
	試験等大学行事のための閉館日
	その他臨時閉館日

開館時間

曜日等	通常期	8月・3月
月～金曜日	8:30～22:30	8:30～21:00
土・日・祝日	9:00～19:00	9:00～17:00

学外の方もご利用いただけます。詳しくはホームページをご覧ください。

https://www.lib.u-tokyo.ac.jp/ja/library/general/user-guide/outside/gakugai

次号の予定

第10号は令和五年一月四日に発行予定です。

ニューズレターへの情報提供、投稿や、記事へのご要望があれば、東京大学アジア研究図書館(asialib[at]lib.u-tokyo.ac.jp)までお知らせ下さい。

編集後記

第9号をお届けします。

この夏はいかがお過ごしでしたでしょうか。私は怒濤の〆切ですべてが終わりました。かつて、ある高名な先生は、「時間があるならできるのなら、誰にでもできるんだよ」と仰ったとのこと。「時間」を言い訳に使わないよう肝に銘じてだけはいますが、年を追うごとに実行は難しくなりつつあります。(J)